

# Sato Project

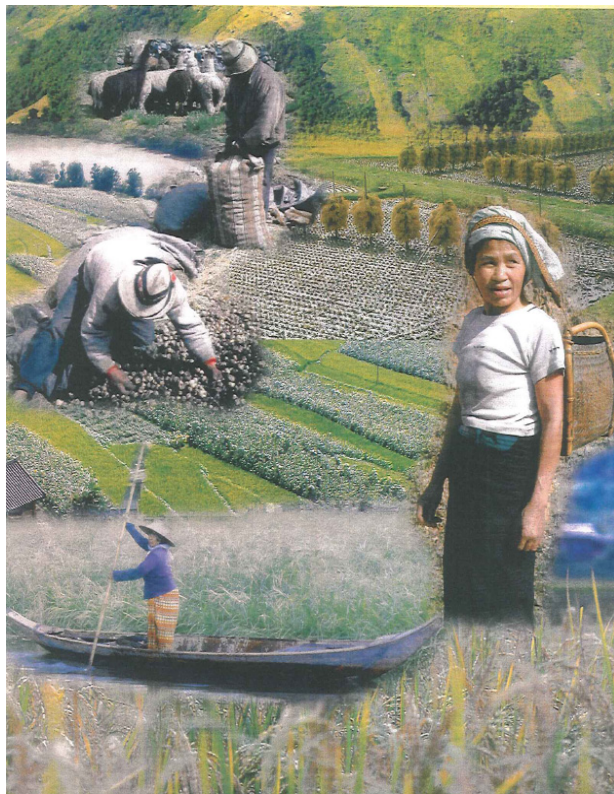
Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—  
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: [sato@chikyu.ac.jp](mailto:sato@chikyu.ac.jp)

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



「展覧会の入り口にある農耕をイメージしたコラージュ」  
(佐藤プロジェクトのメンバーが撮影した写真をもとに構成されている)

## 企画展ができるまで

篠田謙一 (国立科学博物館)

## 企画展ができるまで

篠田謙一（国立科学博物館）

9月18日から国立科学博物館で、企画展「あしたのごはんのために-田んぼから見える遺伝的多様性-」がスタートしました。幸いなことに評判も良く、開催から1ヶ月で4万人を超えるお客さんが訪れています。

ご承知のように、この展覧会は佐藤洋一郎さんのプロジェクト「農業が環境を破壊するとき -ユーラシア農耕史と環境-」の成果を一般国民へ発信することを目的として企画されたものです。近年、国からの研究費を受けた研究機関が、その成果を国民に周知するアウトリーチの重要性が唱えられており、国立科学博物館（科博）でも全国の大学研究機関を紹介する企画展が開催されるようになってきました。しかし、その場合は大学と科博の展示担当部局との話し合いによって内容が詰められていくので、博物館の研究者が参加することはありません。開催期間も10日ほどと短いものです。今回は、共催という形で研究者同士の話し合いをベースに展覧会を作り上げていく、初めてのケースとなりました。また開催期間も4ヶ月間という企画展としては非常に長いものとなっています。

科博の場合、展覧会の準備には通常3～5年程度の準備期間をかけています。この佐藤プロジェクトの企画展も3年前に博物館の展示予定に組み込んでもらい、2年前に館長への企画説明を行って、正式に展示のラインナップに加えて貰いました。もっともその時には展示の形は見えてきてはおらず、展覧会の題名も「人類史と農耕 -農耕の始まりと人類の拡散、環境の変動の関係について-」という、当たり障りのないものにしていました。実はこの時に、プロジェクトの正式名称をそのまま使うという話もしたのですが、「農業が環境を破壊するとき」という未来に希望が持てないタイトルはいかがなものか、という上層部の否定的なコメントがあり、あえなくボツになったのでした。

展覧会の準備が本格的に始まったのは、第1回の企画展会議を科博の新宿分館で開いた今年の5月でした。展示と研究発表には大きな違いが2点あります。ひとつは、展示はモノに語らせる、モノで説明するということが基本だということです。研究者の発表は、学会にせよ論文にせよ、図表・写真と文章で内容を表現しますから、そのままの発想で展覧会を作ると、展覧会はパネルだらけと言うことになります。これでは博物館に来場する一般のお客さんの興味・関心を引くことはできません。展示物が持つ説得力を全面に打ち出す必要があるのです。

もう1点は、展示にはメインのテーマとストーリーが必要だということです。来場者は入り口から出口まで、順路に沿って見学をしていくのですから、ひとつひとつの展示の説明を順番に追うことで、全体のテーマを理解できるように工夫する必要があります。研究者の側がシナリオを作り、会場のレイアウトや見せ方の工夫はデザイナーと相談しながら展示を作っていくことになります。

今回のプロジェクトは、テーマがイネ・ムギ・根菜・焼畑と多岐にわたっていましたので、全体像を展示することはスペースの問題から不可能でした。そのため内容の絞り込みや統一的なテーマ、結論をどのように設定するのかという展覧会のグランドデザインを決定するために多くの時間がかかりました。2009年中に展覧会のストーリー展開を決定する会議を何度か開催することになりましたが、最終的には遺伝的多様性を中心テーマに据えることにして、それに従って「人類と農業」、「環境の変化と農業」、「さまざまな農業の形」そして「農業と遺伝的な多様性」について説明していくというシナリオを完成させ、内容に即した展示物の選定を行っていききました。

展覧会の完成に向けての本格的な作業が始まったのは今年になってからです。2月までに展覧会の大枠を決定して業者説明会を開き、1ヶ月後に業者によるコンペを行って、展示業者を選定しました。6社が応札しましたが、今回は「日展」という、最近科学博物館でいくつかの企画展を手がけている業者が展示の作成を行うことになりました。

本格的に展示を作るにあたって、タイトルもこの時点で決めていた「環境適応と食・農業の多様性」という無粋なものから一般に分かり易いものへと変更しました。ポスターもデザイナーが提示したいくつかの原案から絞り込みました。写真は最終案と最終案として残ったものを並べています。皆さんはどのポスターがよいと思われますか？



(左が今回のポスター、中央と右は最終候補作品)

これらの作業のために地球研や科博で何度か会議を開きましたが、大部分の作業はインターネットを駆使して行われました。実際問題としてネットがなければ、全国に関係者が散らばっている今回の展覧会を、このような短期間で展示を仕上げることは不可能だったでしょう。実際、私自身も9月上旬はペルーの北海岸で発掘調査を行っていましたので、夜（実は日本は昼間）はホテルでメールのやりとりをしながらパネルを作っていました。世界のどこに逃げても日本の仕事が追いかけてくる大変な時代になったことを実感しました。

展覧会全体に関して言えば、今回は優秀なデザイナーが展示の担当をしてくれましたので、ポスターも含めて非常に美しい展示に仕上がっています。今回の企画展に関する科博側の評価も非常に高いもので、この企画を実現させて良かったと思っています。もちろん、短期間でパネルの原稿を書いていただいたり、展示物の調達にご協力いただいた関係者の皆さんの活躍と苦労が無ければ、この展覧会が完成できなかつたことは間違いありません。とりわけ地球研にあって「扇の要」の位置にいた木村さんには感謝しております。もちろん関係者全員の努力によって完成したわけですから、皆さんが「科博の展示は自分が作った」と胸を張って宣伝していただければと思います。

展示の最後に「あしたのたねまき」というコーナーがあります。これは展示を見た子どもたちが感想をお米の形をした短冊に書いて、おみくじのようにつるしていく（写真）というものなのですが、私は当初、このような企画に参加する子どもはそれほどいないのではないかと考えていました。しかし、ふたを開けてみると、それは嬉しい誤算でした。開会日からわずか数日で、棚は感想を書いた短冊で埋まっていたのです。展覧会場で展示を見ながら感想を述べている親子連れを観察したり、このような反応を目の当たりにすると、展示を作った達成感を感じることができます。プロジェクトに関わった皆さんも是非、展覧会に足を運んで来場者の反応を見て下さい。自分たちの行っている研究が、一般人にどのように伝わっているのか、ということを実感することは、私たち自身の研究にとっても非常に有意義なことだと思うのです。

